

● シリーズ 私の見た日本 Vol.237

日本には広場がない

場 美曦 (ヨウ ビキ)

中国東北地方出身。2009年から日本に留学。2019年から来日し、2025年 奈良女子大学 住環境学科卒業。現在、奈良女子大学大学院 住環境学専攻に所属し、公共的空間としての劇場を研究している。



日本を「見る」

2019年10月、まだ「コロナ」という言葉が世界に知られていない頃、私はついに憧れの日本へと旅立った。留学をきっかけに、今日まで5年間、人生で初めての長期海外生活が始まった。だが、間もなくして世界は一変する。COVID-19の流行が始まり、人々が自由に動けない時代に突如に変わった。空港は封鎖され、街の賑わいは消え、私が夢に描いていた「日本での留学生活」は、予想とは大きく異なるスタートだった。

子どものころからずっと、日本のアニメを見て、小説を読むことが大好きだった。そこには、どこか懐かしさや憧れを感じさせる風景が広がっていた。夏の夕暮れのなか、自転車を乗って坂

道を駆け下りる。川沿いの土手を友達と語り合いながら歩く。現実とは少し違うかもしれないが、それが私の中にある「日本」のイメージだった。

しかし、実際に来日してからの最初の2年間は、寮と学校を往復するだけの日々が続いた。外出が制限され、街を歩き・人と交流することは思うようにできなかった。念願の修学旅行もできなくなり、私は静かな部屋で、窓の外の風景を眺めながら、日本を「見る」ことしかできなかった。

大学の進学が決まるとともに、感染状況も少しずつ落ち着き、街に出られるようになった。奈良に来てから、私は時間を見つけては近くを歩いた。ここは恵まれた土地、通学路が一直線

に東大寺の宝輪が見える立地だった。繁々と伸びる樹木の下に、細い路地、格子戸の家、軒先に吊るされた身代わり申——そこには確かに、テレビや本で見ていた「日本の美しさ」があった。しかし、何かが足りないと感じる瞬間があった。それは、私の中で「広場がない」という感覚だった。

広場がない日本

中国・東北地方に生まれ育った私にとって、とても馴染んでいた場所の1つが「広場」だった。そこは、樹木も、建築もなく、何も制限もない。ただ人が集まるための空間。

街の中心にある広場は、人々の日常をつなげている。そこは、朝に太極拳をする高齢者た

ちが集い、昼は子どもたちが遊ぶ場所、夕方には家族連れや友人同士が集まっておしゃべりを楽しむ場所だった。よく見かけるのは、折りたたみ机とプラスチックの椅子を置いて、麻雀やトランプゲームをする近隣の住民たちの姿。時には広場舞(広場ダンス)のようなイベントが開かれ、それも夜の賑わいを支える不可欠な一環であった。広場は人と人の出会いをつなげる「生活の交差点」だった。

ところが、日本の街をいくら歩いても、そのような「公共の広場」はほとんど見つからなかった。駅前ちょっとしたスペースはあるが、それは人が通り過ぎるための場所であり、座って過ごすような空間ではない。公園はあるが、ただ樹木が植えられ、遊具が置かれてあり、明確に「子どもだけのための」空間が大多数。ベンチも少なく、年齢を問わず気軽に集まって話らうのような場所ではない。日本の街は、きれいに整ってはいるが、「誰もが席が設けられている」という「公共性」の空間が足りない。それは、都市の在り方として、1つ大きな課題なのではないかと感じている。

なぜ日本には「広場がない」のか

環太平洋火山帯に位置する日本は、地震や台風など自然災害が多いため、空間を有効に使うことが重視されてきた歴史がある。そして、日本の気候は高温多湿であり、特に夏場は蒸し暑く、室外で長時間に過ごすことは制限される。年間を通じて降水日数が多いため、一年の中で露天広場が使える時間が少なくなる。自然と広場で過ごすより、雨風の影響が少ない室内に人が集まる文化が育てられた。また、プライバシーを重んじる文化でもあり、人が無目的に集まることに対して、少し距離を置く社会的な雰囲気もあるように感じた。日本では「公共の場で迷惑をかけないようにすること」が非常に大切にされていて、そのため「自由にくつろぐ空間」が限られているのだと思う。

歴史から見ると、平城宮跡のような宮殿建築群の前には、道幅73mの「朱雀大路」のような極めて広い道から成った「広場」がある。そこは今時ではイベント時以外何も無い更地だが、当時は国の権威を示すために整備された、祝祭儀式を行う唯一の場所。近代になって、1950年代の米騒動デモ以降、広場それ自体

が危険と見られ、広場をつくることが避けられていた。さらに現代日本では、アリーナやホールのような劇場建築が公会館・公会堂という形で1970年代より全国に普及したため、野外劇場以外、民間で人が集まって何かのイベントに参加する場所が室内化する傾向がある。近年、民間資金活用による社会資本整備(PFI事業)が流行しており、公園緑地のような場所の隣にもどンドンコーヒーショップが建てられ、お金を払わないと居てはいけぬ雰囲気強めている。奈良のような街は、特に歩くことさえもできないほど、道は世界中からの観光客で溢れていた。しかし、それでもどこか「人の気配」が希薄に感じられた。それは、「人のための空間が設けられていない」からだ。観光のために変容し続けていた都市は、消費を促進するチェーン店に占められていた。店に入らないと休憩できない、消費しないと店に入れない。「消費者だけに席が設けられている」、極めて公共性と離れた都市空間になっている。

一方、お店の前に広がる道では、休むことはできないが、誰もが通行することができる。

日本には「道」がある

学部生の頃、大学の授業で「建築史」に関する講義があり、先生が日本とヨーロッパの街の構造の違いについて話してくれた。ヨーロッパの街では、広場を中心に都市が発展していく。特に建築学生として誰もが一度聞いたことのある、イタリアの「カンポ広場」があった。それに対し、日本では神社やお寺、または駅などを中心に街が広がることが多い。つまり、日本

の街はヨーロッパの街のように、広場に向かって放射状に広がるのではなく、参道や鉄道の軸に沿って縦横に広がっていく。東京の街を描いた錦絵もその風景を上手く反映している。人々が雷門から浅草寺へと向かい、両脇に煉瓦造のお店が並び、多くの人々が参道を行きかっている。人々は「機能の中心」に向かって「道」を通り過ぎている。

日本には「広場がない」が、「道」に沿って人々の生活が展開している。

この5年間、日本での生活を通じて、私は多くのことを学んだ。言葉の壁、文化の違い、人間関係の難しさ。そして今、私は日本に「広場を求める」視点だけでなく、「日本独自の人のつながりの形」にも目を向けるようになった。たとえば、近所の銭湯、地域の図書館、あるいは小さな喫茶店。そうした場所にも、人と人がふと立ち止まり、関わり合うきっかけがある。

それでも、私は日本に「広場のような空間」がないことを少し寂しく思っている。「広場」には「お店」や「道」ではできない何かがある。広場は人と人が自然に出会い、会話を交わせる場所。老若男女がともに過ごし、何気ない日常が交差する場所。そうした空間があれば、市民もインパウンドも、疎外感を感じずに街で生活できる。これからの時代に生まれる広場は、単なる「何も無い平坦な敷地」ではなく、新しい意味を持つ空間として生まれ変わるだろう。その意味づけは、新時代の建築のつくり手たちに託されている。



左上/京都御所 御常御殿 右上/ロームシアター前広場 左下/京都市勤業館「みやこめッセ」3階会場 右下/草木が生い茂る都市公園



東京浅草観世音並公園地煉瓦屋新築繁盛新地遠景之図/米斎重清、明治19年(1886)